## 「芭蕉中興六家　栗本青蘿（せいら）」

文化の薫り高い加古川にふさわしい俳人をご存知でしょうか。

芭蕉中興六家に挙げられる俳人である栗本青蘿（せいら）です。

「布南波太也　履奴幾寸津留　水乃月」（ふなばたや　くつぬぎすつる　みずのつき）この句は、栗本青蘿の辞世の句といわれています。

栗本青蘿（1740～91年）は、本名は松岡鍋五郎、江戸生まれの姫路藩士でしたが、行状不行き届きのため藩をリストラされてしまいます。その後、諸国を遍歴して、明和年間（28歳頃）加古川にやってきます。当時の大庄屋「中谷慶太郎」の厚い庇護を受け、三眺庵（栗本庵）を建ててもらい、俳諧師として活躍します。青羅は以後「栗の本」（栗の本青羅（くりのもとせいら））を名乗るようになりました。青羅は度々句会を催し、句集を発行し、芭蕉の句碑を建立し、俳諧師として盛んな活動をします。栗本青羅から始まる栗の本社（くりのもとしゃ）からは、多くの俳人が生まれました。

加古川の栗本庵で「門弟三千」といわれ、東北から九州までの門人がいたといわれています。県内最古の芭蕉顕彰碑「蛸壺塚」（芭蕉75回忌に建立）を明石人丸山に、淡路・松帆にも「扇塚」を建立しました。与謝蕪村らと並び、「芭蕉中興六家」となり、1790（寛政２）年には俳諧師の最高栄誉とされる二条家俳諧の宗匠を務めました。

墓と顕彰碑がある光念寺は、加古川市寺家町にあります。一度俳人になったつもりになって、訪ねてみてはいかがでしょうか。

ぶらり加古川第37号

平成28年10月